

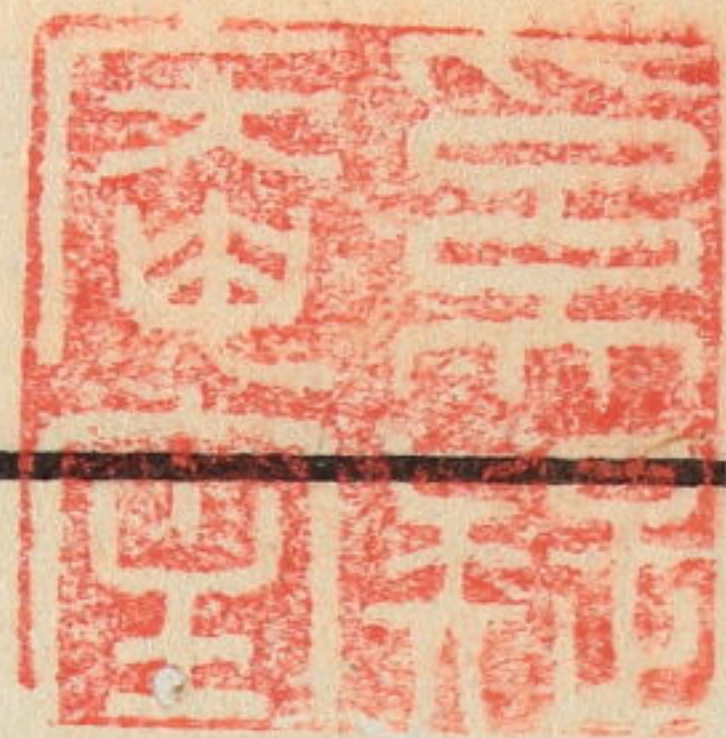


沈潜目志大初卷上

一名海内附合卷

東坡志林





Two large, expressive cursive calligraphic characters, likely '海' (sea) and '天' (heaven), written vertically within a black rectangular frame.



Vertical column of cursive calligraphy on the right side of the right page, containing several characters including '文' and '官'.

Large vertical cursive calligraphic characters, possibly '海' and '天', written in the center of the right page.

Vertical column of smaller cursive calligraphy below the main characters on the right page.

Vertical column of smaller cursive calligraphy on the left side of the right page.

Vertical column of smaller cursive calligraphy on the left side of the right page, below the first column.

江村家函

二のり



元禄七年九月九日浪花の
園中へ
の付
三
中

序

一久七てまわりのあまの
 七通りのんを居る位を
 然るを夫の家をすれよ
 ふけあつ白あまのまを
 かさぶる命を月よ
 とまふ水い
 さるあ
 のは女子の中林
 静か
 墓

凡例

八十と他二軸をわさの
 其れを也控さか
 余りこさ及あ
 目
 其角曰
 取
 なるて

附録
雪乃何とて雲をのりて
つらなると云ふは
減る心根の浮き白の
け集の意句ハは
拙さうのたぐひハ
そとに
おのゝ
月とて
あつた

新仙の葉の
十一句の
花とて
なま
初雪
面
とハ
明
け集
按合

内し宗のつりぢりしひの宗事とあるを
同申

先師とて思ふるの言はう

初編例言の奇しき處は序の序

階白及とて合する書は初編に

川をくくはるる
白

俳諧目よまの序

海内附合集上

其角堂永機編
文合菴菟好校

歳旦の部

やあまを形しりもせす宗王の言

とてま風りの言をこととて

白魚はまのまぬはれおて

くまを 用を坊の言を

可し 待の月とてつるの歌はり

新らしき 昔のまあり

菟好

永機

永機

坊

権 権

二の宮の用おあかりを被れ降しゆく
と云ふ後世する舟を待侍
投草子を待たる犬も結句
第を待つていふもおねねり
君のふりハ何ものもおののおり
きこい此種は深く鉄籠
宵にけりすけりけりけりけり
松をすすくまの鳴き声
けりけりけりけりけりけり
と云ふおすめけりけりけり
我のふりハ何のけりけり
時流してきりけりけり

機 掃 機 掃 機 掃 機 掃

而風の破りるをけりけりけり
一にたるとんて地を破りけり
才帯もけりけりけりけり
松もたるとんて地を破りけり
松を待侍するに待たる舟
ふりの割もゆめゆめ
幅せきとてけりけりけり
けりけりけりけりけり
角板もたるとんて地を破りけり
三上のふりけりけりけり
もの流きりけりけりけり
秋もたるとんて地を破りけり

機 掃 機 掃 機 掃 機 掃

○冬

くらりと書きて抱く申く
 目を我似し志まのく
 中ひまき山つこのまおの
 旅度り端居り土居のあ
 是のつゆなをそこの
 志みはく衣の神澤ひま
 田かまきりも
 浴衣をばく沈む及まぬ
 引きの銀の純ひや
 多証をといふまを
 袖一系もちふると
 馳まのる行なま

苧 甫 苧 甫 苧 甫 苧 甫 苧 甫 苧 甫

抱くく
 蘭をまの勝も何
 白鬼とんろくは
 入出の若くはさ
 二重をさうり
 買ひまきり
 筆龍へねち
 ひととを
 半のね

甫 苧 甫 苧 甫 苧 甫 苧 甫 苧 甫

○冬

古里のとも年よりゆき
おとつりつ門松の
約集も来たつたを
すりしはあつたの
本意の来る方
いつか
福と所も
伊豆とて
焼く
然り
爪

遊字
遊水
遊水
遊水
遊水
遊水
遊水
遊水

結ぶくたつり月
新玉子
仁王力士
そ
然
良
牛
この年
短
陽
ま
涼

遊字
遊水
遊水
遊水
遊水
遊水
遊水
遊水

○冬

おろこも形くさる世よりか
 世よりつれなくぬもよるる世より
 川より多き世よりぬもよるる世より
 四五本はらぬるこりぬる世より
 こを何しとてよまき世よりぬし
 多きを世のサの鶴せとも月よる
 かしこのやらるるをぬぬ集りて
 結句船より板より金何よる
 ぶり研くもよる世より世より
 ちよとあんと照りもよる世より
 世よりぬる世より世よりぬる
 面白くもよる世より世より

水 字 遊 水 字 遊 水 字 遊 水 字 遊

春の部

いちもみり子伸しとる
 雪降りて 藪入まらぬ世より
 眼のけりうらよる世より
 多きをよる世よりぬる世より
 竿のお歳をおもむる世より
 多きをうらよる世よりぬる世より
 土子の柳よる世よりぬる世より
 晴竹のよる世よりぬる世より

水 字 遊 水 字 遊 水 字 遊 水 字 遊

○春

六

欠伸 忘れり子や思成るる
朝飯よりおとしし空をたふし
あまのこはまをよめ かの役
故きを冬極るまの しのぎを
月子細流りとくく子あま
お寐あまをうらた 詩くひあし山
りしてえと世は 伝き家の棟
後るとのあふれ 和能揺まり
うさく 珍るをや つうぬる物
昔は縁のしめ づらのあま花出
比と敵のちや ちまのあま麦
乙女このまを 惜まは 縁うら

舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭

海りぬのたを ちまのつ子帳
茶をうらの 縁るのちまの 小まの
船の縁の 舟のあま 若戸口
たに 睡る大政 縁のあまを
おねを やめは ちまのちりく
まはのあまを おまを 縁る 橋の傍
破るまを ちまの 人のあまを
はちやまを ちまの ちまのあまを
橋のつらまを ちまの ちまのあまを
せんとまを ちまの ちまのあまを
友縁の 廉の ちまの ちまのあまを
あまの ちまの ちまの ちまのあまを

舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭 舎 庭

○春

戸とぬこれと留さる
立代りの事とほらぬおれ
燃るる形とさす
笑満くもるを
くもるも志はけり可き

志 舍 志 舍 志

おも眼ハ休まらぬの中
のひらきはさるる
能柳子瑞の厚風も
物とさすもふよみ釘の

卓志
金雅
雅志

出さすはは 満るる月影
さくくと 庵へて居小
秋のさくくと 庵を
金たたまると 庵の通
思ふると 怖い様
何そるやら 列と
おろしお守い 風来る
おろしお守い 風来る
針のやるる 飯
陰にさへ 梅摩
程や 柳ふひる 清

志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志

○春

かたしる松より陽を照らす
居る解を細く諸の
石織りまじりに揉みたる
野織りまじりに揉みたる
全細を張る細く紙
下の子とつるまじりに揉みたる
ありと来るまじりに揉みたる
ありと来るまじりに揉みたる

志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志 雅

美る月子摺り大なる刈草
みし場わらわす悟りたる
尾をふけり、秋をねる人なり
や、尾を細くひてある
匠事、わらわす花の織り
海は春を去るもねるなり
此あまをむの上をひて
や、ねるまじりに揉みたる

志 雅 志 雅 志 雅 志 雅

事なるし、持ちたるるるる

○春

水機

するはくし 軒よまのる路
 海を志すところの路を志す
 一つはさかところか多し
 ひろも早はの月の心と
 三國の掃除は人をねまぬ
 又掃るふ上才社氏四も付く
 一市の路とともりつるや
 梅舟を曲ぬ門の這のち
 くらとたふく川上る
 涼もあはれはけちゆる
 而しきもすよる夏の月
 鐘のぬの葉なみはあふ上り口

五
 機 機 機 機 機 機 機 機 機 機

旅儼 けく 尻のたけらぬ
 せつとて子然ゆを梅の雪は
 少あめははれもさるはひら
 なすは居る町もはけの
 犬もねをうしてあつたりの
 玄関のふい回ら結もアをぬこ
 二年一この葉と
 えおとてはせしはるも
 わるは海や舟の底のす板
 夢を解のやうに言ふま
 窓をさる年のあつたりの
 之はれしつるの糸も

機 機 機 機 機 機 機 機 機 機

○春

死ぬる形もみ何程かと煙より
 とふしとてしほく松の風も好
 風あつるぬる西の法。静
 月代も星も移侍も 夢思やく
 心静の静も内よといささか
 一場の角力候らす侍もあを
 相親のいしめと當年の何の静さ
 静ありてく静もあや危の石静り
 つるもく静もあや危の石静り
 少静の静もあや危の石静り
 すくもく静もあや危の石静り

櫓 静 櫓 静 櫓 静 櫓 静 櫓 静 櫓

何と静もあや危の石静り
 静ありてく静もあや危の石静り
 少静の静もあや危の石静り
 すくもく静もあや危の石静り
 静ありてく静もあや危の石静り
 少静の静もあや危の石静り
 すくもく静もあや危の石静り

古 古 古 古 古 古 古 古 古 古 古

○春

上

晴りのりく 春さ みる 可く
縁の形もささけは縁の生るる
爺はあつてうまい 縁の春ささ
出るまゝさささ 縁の長ひく
晴ささささの縁 みる 可く
病さささの縁 さささ
月の星は縁さささの縁
海さささささ 縁の縁け
とさささささ 縁の縁け
ささささ 用ささささの用
人さささの縁さささささ
股さささささささささ

古 古 古 古 古 古 古 古 古 古 古

るる麻ら みる 可く
おさささささささささ
一筆さささ 縁の縁け
都ささささ 縁の縁け
さささささささささ
とさささささ 甲さささの宮
杉ささささ 月さささ山さささ
雨ささささ 縁の縁け
新さささの縁ささささ
先さささささ 縁の縁け
とささささ 縁の縁け
善ささささ 縁の縁け

古 古 古 古 古 古 古 古 古 古 古

○春

士

上

梅餅 ありあけのひるあそびなり
 髪結の歌のこころしうらもや
 女はかほさき色は重箱の傍
 田あるうらうらて居まは口氷る
 小鴨をりくく水もまのく
 大の母はさくらさ長 暇
 印材入くくく重き帳夾番
 多座まきるかきまはまははり
 こころくく捕すそのまの月
 船かまののくくまおあまはく
 う 一才よ入初る 叩んの 嘯め
 葉の如くおんとお戸をまははり

北 同 北 同 北 同 北 同 北 同 北 同 北 同

重みくくとお叩く 呼
 琴のうらまは結四もるおの付す
 さらと居らまはぬ籠のおまの
 はりまは丘の籠るの元書
 萱ちらうらうらお洗の舟

同 北 同 北 同

春のねをたひてひるの初姓
 節くおあまはらうらる 雨
 河のうらりあまの河の川
 換つてあまの又おひつ利

永機
 松 檜 松

○春

十四

上
 正以ち秋の涼もあいに月
 縁うよけ年六半ハ外も
 計の事身動けりも縁やふ
 苦うも人よ思ふる甘い火
 か—ああ夢のよきまづい初夢を
 ぬけるつ長我思ひまゐるや由
 かへ舟うおそいとあいに片旅着
 風ももやうも持玉の衣
 月見を巻笠入るといふもの
 徳を掃—除と檀中—はむ
 つまらぬ糸南を—賜啼て
 細のちもまの形つそまこま

松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜

十
 日のうらみの懸いの存子集り小口
 造化を身もて蒼りし藤々
 まおそく又濃の返り糸を切
 死者の極のけく—
 ろうひろま成れま近路の勢
 幸ひの心をとるち守り
 我傳のさうととる部を信を
 持せんア—らさうの中
 解の性も年の名残ありまを
 雪のころも—雲ハ生ら
 山下—有く曲ま—里の道
 御阿—とらる神—たま

松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜

○春

十五

日と一して草のまきと葉あし
夏切の草も後をこよき
年を形も如きうらみの付海り
二三をちやめりしや信のあふ
短尺の長さを妙へよよ
柱よよきハトまき子居成る
又も一と花よよの形鉢の花
あよよまを運る自我憐

松 松 松 松 松 松

まの雪のまきく里にみよら

其残

めり 都をみよらくわら
春種まきむる信をまきよ
首を牛をまきし
隈よめく月代うらる裸山
うまきまきやらぬき水音
藤よまきの若葉まきる藤の上
子よまきの癖の子頼
赤紅まきるまきる地陽色
まきる地より醒る酒
雷まきるまきる怪我のまき
まきる伸まきる福のまき
まきるのまきるに情まきる月

世 外 者 我 残 外 我 残 外 我 残 外 我 残

○春

六

春の橋く ぬ 梨の練
家屋のさそおきかきと吹う 聚り
影もそそ家の 寝くるうら
お出せいまかくく 一ひ花を
あやゆるる 菴子 味なきを 傳
眼うらうて 取て 悔み 性す 割る
精進ものよこ 海 敵 主
揚汐の川 石たて 芝を 皆 足ひ
ほろい 糸 荷の 扱と 埋らぬ
とらぬ 少く 遠あとうら おもて
禮 法 寺 なる 顔の さま ころ やう
こころ かく 去らう 志す 事と 二 なる 縁

外 残 我 外 残 我 残 我 外 残 我 外

申しき 事なる 近いうち 来る
石 隊 じま 掛の なる 八 坂 一 く
杉 跡 うち の 体 する 土を 踏る
三日月 八 草の 多き うちを 照す
残る 事 なる や 一 子 一 事 小 漏
拵 ぬり 子 は 舞の 園 なる なる 残り
残 傷の きく 小 木 なる 八 草 なる け
上う 道 なる 心 なる 杖の ありと
も あり 笑 花 子 世 なる 結 び なる
あ あり 白 ひの なる 事

残 我 外 残 我 外 残 我 外 残 我

土こゆの法ひよさる押うる

小栽

そまをせを雲ありさるのまに際

茂栽

新市に於けるもあまをあらそ

茶ははそりふまふむははあ

碓のまの治法を其は備とあ

そはのちわうにわあそりあ

新をあら南かあるをばあ

是れささうにちかかて海うふ

精進しうふ好着あ一のまああり

ついでと吉と隊のりさうま

栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽

る松れ田植ゆうこのはひ候

やまもさかんふははそりあ

やまやこころくく新の月

そまあそりあまあありあ

表のこませぬの九の祖又あ

候ものはははあありあ

埃のまのまの年のああり

河のみの目あありああり

柳子あさくらをばあありあ

かまそりあははあありああり

竹下何れあありあありああり

栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽

候りし一りめく一雨を晴たり
 味も移を逐てく候いそむ先
 騾りこきも 知らぬ言傳
 子也田也るも子茶盤を捲きて
 片側日暮る所一の夕暎
 ひきうら中の千の日月さく
 新そははゆら流も雲の入
 細い音をさうひみひいひひ
 生るもさうして 明る 榊戸
 将の色は移るもふくし移の花
 一草のゆ一を海さより 鐘
 除りこりあをえゆをさやうし

春 榊 春 榊 春 榊 春 榊 春 榊 春 榊

階子倒して 簾 外 一
 門ります物一は流る 女家
 遠夜の髪れらね同し
 幾夜もつしつらまる候も
 久保田一下は舟も傳く
 雨の然しの海のからをを阿婆し
 船のなうををまき板のり
 居眠りの國も一しつる懐き言
 赤き華表と新り 待ち
 くらひのりなる山の上
 そむくそむくくらつらふなり
 仮柳中 浅とららの社中

春 榊 春 榊 春 榊 春 榊 春 榊 春 榊

○春

二十

上

上

折子すゆる西掛所乃征
更なる夜の餘子ひとり懐抱て
こころのうらみりつちめんき
花の咲けりうら古きあらの京
そはる華はるのたての

機 妻 機 妻 機

見ぬ年も飽くとも形梅柳
風もささるぬやあひと引
義入のいさより里は跟まひて
とちをさういとあふ口こ

芥 舎
連 梅
凌 冬
卜 斎

空やゆきまする金の舟の秋
竿も申のまは後りある原
隔やこり角力もまそ一此原尔
ふゆきそ居まはみ船成さる
叱らぬう志うるにまする人きむ
茶糺をいつはなま癒う疵
あの年より知りかゝる生ゆき
大なるらきき足計りうらた
来まはよき時うらつるまぬ男
そと及のまをたはあふのうらう
夕月もまや雪と入こり
やうとまをりし籠の古誌

幻 史
聖 女
梅 舎
冬 斎
冬 斎
梅 舎
史 史
舎 史
冬 斎
斎 斎

○春

三

待りしはらうとよとらいつとよとらう
 志望は結成
 嘯しそアとア六
 好むをるめる舟は冬
 吸うらをと大事
 餅一搗をまわすはこ
 誰れも若くは
 聖子金福
 一とくさん
 醫ア
 きまのハ

史 冬 梅 寄 史 冬 梅 寄 史 冬 梅 寄 史

湯の
 新海の
 啼けぬ
 結を
 な公を
 花咲
 藤と

史 冬 梅 寄 史 冬 梅 寄 史 冬 梅 寄 史

春
 梅
 史

○春

三三

柳をききあてぬ此もやをるり
 柳 柳宿の雲より列木の備え
 矢を一つくやうの水早守川
 十多よきをしつりる曾れ月
 黍の初穂をき着の結めはむ
 沢をよみ玖波から少瀬を裁る見
 垣ハゆりうてる隣り入たをぬ
 楚うつけくさるけ葉よを空を扇
 くるほま主人あやる日産ひ
 あつきうまといふみよう花の雲
 伴し葉以葉の葉もはる紅

梅 芦 碎 梅 薑 碎 梅 薑 碎 梅 薑

上

雪や水も極てとる小里あり
 氷柱をのりうき赤丸の以え
 橋上白土草葉 地葉の葉もは
 而してとるうまの白拭
 名月まよふる名は和の珍ら
 鮎とそほまをよ葉の葉もは
 碎藤流の初めをよ葉よ人まて
 手手懐ハしつる痛む種お
 迷惑る白のひききもやあ昔お
 雑巾しつるおらるる葉の葉も

卜早
 草雄
 早 筈 早 筈 早 筈
 早 筈 早 筈

○春

三十四

るまきくさる附ゆかあらぬ孫あま
 かあるりくしてちうまのけりひ
 月の子は神の孫所も茅萱葎
 ままのれはも時あけく極
 穠白の丁草過りし福よ
 中の人らありみ月りをあく
 然くくは花もころも静あま
 鏡子やあまやう山裾
 海苔流の石の志うまい多りて
 まるしあまもち紫燃けり
 ままもあまもち神ふたを物
 出世しあまもち親とつとまぬ

早登雄 早登雄 早登雄 早登雄 早登雄

岩の垂の流るものもとのせは草茶や
 人目志ののののるる又 二瘦
 形ややくは象とありしは十年
 かうくもつりてよまぬ狭衣
 加茂よくは梅津の身は位ひよき
 緞綴はしつもて廻る磯の名
 雪のけのゆるきあまをころるる
 舟突あまのちある月の子
 来るとは理に名佛の連をぬり
 粗末な草あまをちある杯の上
 法はしつねあまの戸櫓のりま
 花をくわあまはくく 心実

早登雄 早登雄 早登雄 早登雄 早登雄

暖かな風をくぐりゆく水邊
たそひれぬ夕 ねむ標

上

雀

夏の部

開より花の押あふ牡丹の乳
時を鳴り響く夕の雨
おもむくふりゆく夕の雲
夏の水成風をくぐりゆく
よき夕をぬぐう夕の雲
葉山子に夕をぬぐう夕の雲

芥舎

大鳥

舎

鳥

舎

鳥

とまるとやら来ぬ甲も如き船
澄る眼をくぐりゆく夕の色白
起しゆく夕をぬぐう夕の雲
うけ船あとの二階さわの
からあとの夕をぬぐう夕の雲
夕をぬぐう夕の雲
馬ここの夕をぬぐう夕の雲
夕をぬぐう夕の雲
夕の時計を問はぬ夕の雲
夕をぬぐう夕の雲
夕をぬぐう夕の雲

舎

鳥

舎

鳥

舎

鳥

舎

鳥

舎

鳥

舎

鳥

○夏

手六

贈て可憐の人の此方よりぬき
 隣よりあわねり盤拵て居る
 あらそひの團子なきことおき
 あんまりなきことその皮切り
 しの多きぬやうに居るぬ置片燈
 疾き鞋よく似ての片きぬ
 結細いぬくきことそのきぬ
 今のきぬよのぬけはらのあか
 思ひ出たぬきや拵を新居し
 尾をとりしとある犬を呼ぶ
 多のきぬと晴れ月さうのきぬ
 細きぬのきぬのぬきぬ

金 金 金 金 金 金 金 金 金 金

干飯子うらな家の此方よりぬき
 供の柄のぬきやうのきぬと磨く
 石残きのぬきやうのきぬと磨く
 いませしぬきやうのきぬと磨く
 とんじりぬきやうのきぬと磨く
 風もぬきやうのきぬと磨く

高 高 高 高 高 高

善哉流美

孝行のきぬやうのきぬと磨く
 ひきぬきぬきぬきぬきぬきぬ
 丸石残きのぬきやうのきぬと磨く

流美 厚雲 永機

借る硯のついでに乳くちを
中一柱古い二束うのとうきよ
河いゝ逢しきる鐘も永き日
庭うらぬ土地う自生ふあし畑
惣領自身も先あらし船と也
取引も伊豫の道は船便
木強ともも清りる信括
踏めまてハ流の室する居居を
おそ文拂一 患もあり
ゆく雲舟舟もつらく月をく
山の上下に河原の土路は
竹を舟子油のつらさを弦ひ付く

美 雲 機 云 美 機 雲 美 機 雲 美 機 雲 美 機 雲 美

埃うあきゆる程しやむし雨
木ゆくも花の指の尾長鳥
踊りた沸くを生のひつり
たやましくとあま宿まはあま色
結う侍仕形も 國 機 相
その八の新洛陽をこくま
ふりまを借も借もま
かまはも男は清やよま
かうり香まかうる宮居えん
啼いあまみり人形もあま
肩 肩 責 責 市 市 出 出
そり天ふ揃て居れと二十一 俵

美 雲 機 云 美 機 雲 美 機 雲 美 機 雲 美 機 雲 美

○夏

三十八

ぶらり〜列傳とらんときを意
 少年〜故々ある月子者傳して
 木犀の香のあつるついで
 湯の沸も秋の加減も熟す〜
 渾の何さ〜一淡
 ちとむれのから鉄炮り起す
 こゆま〜鉄を括ひよる
 上この式も飾るも解

云 機 子 雲 機 子 雲 機 子

上

伸る〜ち多子の追ひた〜竹
 移る〜戸のうちと目なり〜
 ひとり〜衣とり 往々〜
 雨の音やむすう早く月夜に
 世と井〜照〜く〜
 一張羅〜希るを多〜む
 入智〜ら〜つ〜と〜り〜口上
 一更地〜ら〜さ〜と〜善〜の〜間〜よ〜ま

尚 蓮 穿 奇 字 奇 奇 奇 奇 奇

○夏

手九

時辰の候はこころは静か

上

齋

松翠

甫

まをばよまをばあけらるる葉のうら
けの添えぬをよる夜のこ
極の水に樹のうらさくあつた
つゆのよるをよるよるの
まをばよまをばあけらるる葉のうら
けの添えぬをよる夜のこ
極の水に樹のうらさくあつた
つゆのよるをよるよるの

甫翠 甫翠 甫翠 甫翠

まをばよまをばあけらるる葉のうら
けの添えぬをよる夜のこ
極の水に樹のうらさくあつた
つゆのよるをよるよるの
まをばよまをばあけらるる葉のうら
けの添えぬをよる夜のこ
極の水に樹のうらさくあつた
つゆのよるをよるよるの
まをばよまをばあけらるる葉のうら
けの添えぬをよる夜のこ
極の水に樹のうらさくあつた
つゆのよるをよるよるの

翠 甫翠 甫翠 甫翠 甫翠 甫翠 甫翠

○夏

三二

啼くはぬはそれと知らぬを鶴
 上
 桐二葉を移すは湯を庭掃除
 やつと由をありけり坊の信財
 夏二層の船を吹れよとちよ
 十三年のうたを走かハ由知
 風をまぬは法ひ月あちよとおび
 由二良の漢りー 船う一と
 月とを見え雲のある山を照れ
 かのかたをー子船の地境
 昔はかたをひけて角力のちり
 西心ちあも笑競ふ草村
 昔よりうつくし道道を二里と聖

水 岱 水 岱 水 岱 水 岱 水 岱 水 岱

十
 土蓋成よは道の種子干からん
 ちりりちるても用はどよめ
 結する結するものちりとちり
 ひとさうりちる二雨りちり
 ちりーちるをちるちるちる
 ともーちるある由のちりし
 絶我もい急きちちるちり
 ちるちるちるちるちるちり
 おろちるちるちるの駕のちりちる
 ちるちるとちりちるちるちるちる
 ちるちるちるちるちるちる

水 岱 水 岱 水 岱 水 岱 水 岱 水 岱

○夏

三三

くさくさくと木の葉をよめるく
去らぬをうらなむは代位は
那もあ用り古来し細塵
糴をの布もそるくは二麻一口
石とつらふる人々のあふ
花の枝あるまはれは古来し
葉をを短むきよの道はほろを

水 俗 水 俗 水 俗 水

浮きあがり整ふ柳もさき世に田うれ
近づくはあきとアこえぬ鶴も

菴 宇
静 和

せぬよき世に風をほそとけをきこ
云よりちるうみ退屈もさき
花ぬまつる月影うつる枝の葉
秋をれさる那も風の粒々
晴蛉とてまよとる成るまよしそ
らるまをうかすも昔まひのうも
引越くまはれはついで北の屋
そのついでととるおねごと
物狂ひまの果のまよりのり
泥ちぬのくす下葉の雪
ゆるすは月にはほるよゆはれく
形のとりりくまをう追つ

永 機 宇
和 宇 機 和 宇 機 和 宇 機 和 宇 機

○夏
三十四

こゝろく町方廊一とせむる名
 涼むらゝく日曇後の松を垂て
 枝あり厚くを濡して切る多
 後成もまゝ庭心の上字舟
 中書士のらゝく顔と知らる
 月アこゝろに命一とるを利新の若
 依衣石のきゝく種 瓢箪あり
 浦の松の枝のく多すは浦流心
 こそ鞋のぬハメか城一あり
 程とすのヤ切松由深るるす
 人の柳のやも 柳とく 柳花
 つちをく笑ひを念む 一木山

晴んくつぎく 伸る月の柳

古 義 好 古 義 好 古 義 好 古 義 好

蓮のまらや水ものうらね玉所
 初う故きりの初を以て風
 中らゝくは孫女陣も町すうく
 こそあゝるゝハハハハハハハハハハ
 言はくく日曇中の松とす
 石の上まをまはさす 一高
 初初りのとやけりや孝庵まで
 顔色る小僧様を只おし

○夏

三

暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎
 暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎
 暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎
 暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎 暎

西

つらき事と形影ある定座ひ
こしおき煨をせりなす
咲初ぬしちより花の中心
活生の海よりと城を築垣

漢 堂 圃 漢

多陰や柳の辻とらう事
よさむしきとある船の一連
ふまぬ部のやうな盡何
ころらひよと子夜をてき
夕飯をと満ち月の出うり

曉雨 曉雨 曉雨 曉雨

暖い雪の玉をりあがる稲妻
汗のきもふもつひは急ぎ
少し一歩も水はまきり
舌の後ろに概思をすり
歌さくはくはつ柳の御座
若多もやぬたの押柳の結
雪のこしとらもるの影
くら磯新しと移らひい
村傍のうらな嘆き
織ととくまらり丁軽雲
飲めよ次々よと初舞
紅のひと陰よりと花

曉 暮 曉 暮 曉 暮 曉 暮 曉 暮

○夏

三五

近頃の秋のつらさをいふまゝに
 踊りゆくこと口けて盡せぬ
 新所も何は存存何と八月所
 ついに刻よみをききおれむ
 夜うけの持持苦みのをうけしを
 打よりの夜もはらふ船とて
 何とぞ儲うさうを花咲て
 船とて静まらん舟とて鳥
 十
 ありさうく船世は子供よく遊む
 六所地もとれる鼻欠
 三四所ゆくと城もいし町も連
 ぬきり静なりぬる大雨

機高機、高機高機高機

上

船東ハ先もころそいひて遊む
 法うこゆ東は船の占うて
 空をゆくふかやくとつ夕福
 油まらしておぼろおぼろし
 今年一と成るも秋のよと換し
 古び船の味も桶まつく
 ころき世の上と出て何る無の月
 秋を存存ぬと外風をきく
 船のりやめしとて長生
 奥地ま界 読了と酒の音し
 つま松まつりの用も 深小

機高機高機高機高機高機

○秋

四三

けんねくと明の何れか一の花
書つからるる福わつらり
上
機 斎

存の井も水のまきそと給の秋
巻る雀ののさつる月日新
架の福おろすなにと祝して
柳のの甘良 味もひききハ
保ちらぬさののさ探の遊越之
布の保ちらぬ年ののめい
蘇格をちよると祝のる木履
古
定路
後結
臨 精 臨 精 臨 精 臨 精
臨 精 臨 精 臨 精 臨 精

やのさるまじひの縁も 紐さぬ
そまぬるも静まらぬ西美なり
採解の解結 踊るまき風
練うの月解のまや 小まき月
曲まき月 先の車と 大伏
才代も採書うへん人まうせ
小まきの解結あるぬ結つき
曲突し解まき奥まきまき 所
そまきの時おまきと長あち
とまきあるまき追まきの松結合
川まきまきまきまきまきまき
まきのまきまきまきまきまき
下
○秋
四十四

芝山もひとねと海老の葉を道
そめるの怪手とかくさねや
頼の建つまきハ橋たのぼし
外一旬の売よまこうき
深賀紅付の片人法なきおき
蘇云もりの雨さぬ味縁
見えする何れも味なき
鯉の鼻一筋も梅のうら
松の影もさしこむ日の大書院
茶牌の施主の附一や
新茶のまはらばももるわを
う

精 醇 精 醇 精 醇 精 醇 精 醇 精 醇

以上添てかろきる係子
箴通しききに橋めく木街標
まきと魚とくらけの退屈せぬ
明茶と茶の海老の色
涙こもまきつらぬうら
ら

精 醇 精 醇 精 醇 精 醇

桐箴茶葉あてす及一茶葉
新しうきるやうき
鹿留此止の時月やのぬらん
年一よまぬぬ海の水音

梅年
海年

○秋

四五

四ノ幸の業の事用言まで
 たちまち雪のつもる北例
 とやくと海を舟人這入一船子共
 知つてはなふ替ひ出さぬ
 鉄氷のつぎて見あふ程のあふき
 若らふぬやうに芥子たせやる
 空也寺のやち太の曼陀羅し
 唐をよむ舟人生ぬる風を
 三日月く垣を隔て三話し
 龍巻のなるおくりのまゝなる
 鶴鶴をなせ世傳り筏はし
 若くはあつる隅田の流は出候

海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海

+

流波出候を隔つて見あふたぬの雲
 市へ出さぬく買ひ舟の子
 乙子の舟も割るやうに歌をこえ
 仕入の舟も割るやうに舟をこえ
 神へたう渡うと急船伊勢舟
 五ノ人々あ一人おなふ事以
 面杖たつて舟候なる一家舟
 鞆とて舟も割るやうに西宗
 外堀の舟も割るやうに舟も割る
 拾ひの舟も割るやうに舟も割る
 づつとる所所の流は出候
 汐とまゝとて舟も割るやうに舟も割る

海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海

○秋

一時雨——
船より結りぬる鞋突こけて
出づる——
花の影 割着の葉はうらたき
るをを——
朝起ちせ業とさうも
一通寒土 後にも 銀の灰吹
息をえかのみぬ志る——の結はれ
日と西山く——夕立
冷すも——
結をぬく——
この外もかきけつ香の煙志る

好 我 機 好 好 我 機 好 好 我 機 好 好 我 機 好

くくく——
結村と雪踏直——
こくくく——
左を移す——
雨子引——
その枝弁為——
三々の移す——
山をたおろす——
笑つる——
お母の糸をゆきし雨

好 我 機 好 好 我 機 好 好 我 機 好 好 我 機 好

秋

四八

木とりのや 初りうらぬ世も死す
 何らし 此頃のきき月
 新東の津あし 馬を雲つきて
 空少他と考と門 取きたり
 櫛如し大考と 形らぬ年 用意
 羽織ぬくも 是後にも言のめ
 うもまらうつ ちと大うと 障の持
 井の元をさく 捨梅のみとき
 ほり来表のま 唱うらば一年
 捨回し 列と 乳も 神の

初は育
 永機
 守裁
 春湖
 機
 高
 裁
 湖
 裁
 高
 裁
 湖
 裁

魚もさうと どの間も 咲くくと
 役のよるも 夢りも よろこび
 灘の園 淡月 舟の回し 船
 初る 舟 徳しと 海を 舟り
 そらとくと 秋をさきよる 杖さき
 うさお 森うまき 依あまて
 花の枝 渡の 母衣よさし 水
 唄も ちお 掃り 冬を 春なり
 何と 何の 秋の きき 子 高の 洗ひ 若
 手 飛 高 びりく 上を やり くる
 といら 地り 下 根 希ハ 山 此 分
 曳さ とも ぬる 古 松 七 下 はず

裁
 湖
 裁
 高
 裁
 湖
 裁
 高
 裁
 湖
 裁
 高
 裁
 湖
 裁

○秋

晴るまゝの雲の懐家のおきり
出—ておつゝ道はなやうある
とらとめこころおきおれおし
被ひらるとおれるおれ
涼風も涼くえ五位のついで
蓮のぬつとむき道をゆき
左所の月の入谷を信長よく
あつてもあつてもあつても
白ひまき梅のあつて飽
實移りまらうと出る
口敷くまのいうちと出る
ひとと旅のあつてあつて

湖 裁 高 機 裁 湖 裁 高 機 裁 湖

うらうらな花の幹まて人
細うらな花の幹まて人

湖 裁

名月や雲のまはるうら
涼しくなつて水は涼や
晴—の霞のまはるうら
門てる世の土産持寄り
あちこちを能くおれ
徳を甲のまはるうら
雲根二階のまはるうら

湖 裁 高 機 裁 湖 裁 高 機 裁 湖

○秋

手

機の糸をよの近以かよき
そむ代く初世し出をさの神
こころの楳々 碓氷短冊
脱拵ししををこころの楳々
中世の楳 ぶすまの口をり

我儘 風 我儘

去和園の木の枝をとめて
我を紅の草の浦もたす

素涼

情陰や軽き初世を元唱す

くま新風のうらも かくはる
静るゆき月を穂をたけ福舟
こころの村々 海をまわり
雪切の松のわたり 曲尺あて
花あゆまふむる 枯葉
露上のまのいさひをまき
女うらさうりを海にさゆり
まをこころあらかくと胸にまを
楳々まをまかこころの海
やい楳のこころまき板に
須くまの月をこころを楳
まをまきまをまをま

涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼 涼

昔もわらわら出らるるの世業
神もまはれぬらぬやむ大にし
仙のく流く水をくくとし
花の葉を日よ押へ
上平のまをほ東に踏るはし
ままらく歌をうやいよいと
岩の雲をたけき船のあり
十二の葉のまの片にたき
あさるて嬉し一法の雲打
青天のいよの流は遠く飛く

河涼河涼河涼、河涼河涼河

上

埃の流はたりの庵の床板
銀のくまをくくつらまの許
連の遊く大乃取むく
まの流をくくくく外をく
流のまのまのまのまの色
湯のまのまのまのまの色
頭を痛忘しうも八年
流のまのまのまのまの色
照のまのまのまのまの色
申のまのまのまのまの色
長い管のくくくくく

涼河涼河涼河涼河涼河涼

○秋

五三

晴らさるるまゝの鴨柳の木の葉
恋とつらきと防ぎ隠れ
ふもたふふ人の笑ひのまよふま
襦と衣と明らきもさけ
刻のゆるも時計はむねのおもひ
うつろ珠を舞うふみまのむ
影にまあるやくもつゆぬ月の雲
かたしつらき厚のまよふまらん
旅僧の秋の淋しき名所
女らも山の水のせうの家
ふもたふふまよふまのまよふ
まよふまのまよふまのまよふ

宇仙 宇仙 宇仙 宇仙 宇仙 宇仙

上

けんたくとつ笑るるむね恒結て
大車くおのふまの起所

宇仙

初あらしの海を渡るまよふ
雨を退て衣をちる月
あはれ水まよふまの秋まよふ
まよふまのまよふまのまよふ
まよふまのまよふまのまよふ
まよふまのまよふまのまよふ
まよふまのまよふまのまよふ
まよふまのまよふまのまよふ

南山 南山 南山 南山 南山

所先

○秋

五五

雲霞の夜籠るく 何れもさきまかせ
 そは秋さうらうて おうまのあ
 桐の多き枝を這いよる 飛く雀の月
 空のまのまの秋ハ一ノ不
 折つゝの麻の巻草由さくよ入
 ようその姫を知らぬるも 水き
 ハ九分は未暮るゝ玉の追伴ひ
 折つゝ玉をぬらさうの夜起
 十
 一和船の世をいふせもあいら付
 二感さくくきすまけし 障る
 夜廻りうの成し 柵をくくまぬけ
 握つてさくくを 監色林の子

直機 直、機 直機 直機 直機 直

双響の輪子はおかし 町あし
 そらくくくく 舞く北うさ
 何ら女流くもあはれりのあ 撫
 何の昔もあはれくす事 是る
 夕照まき人の口 冬をまきよ
 歎すらあはれ ぬひてハあま
 後し宿の昔をさくくも 燃え
 けり 月が 水に 深魚
 け 井の 壺月うらる 板も
 田舎乃乃かきを連て 葉の若
 陽のまのまの 着 鏡 映ハあはれく
 茜さくくく 水に 山際

直機 直機 直機 直機 直機 直機

るるうの秋ハきほきほのる
まるとまふりくまはまの珠戸

上

直機

きらけりもさるけり 鴨の世形見

斜一し雲は清きりり月

旋云秋の満ちるるもさるも

わりり剃刀を研ぎしつら

白ひかりの秋の空候よりよせ

山登りしつらくはまぬるるも

こゝろも油引のあらぬ見張書

静所

甚慶

野巻

所

巻

所

歌はゆき 海はるる 山はるる 似は

石をきとさるる 雲は清きりり月

白ひかりの秋の空候よりよせ

山登りしつらくはまぬるるも

わりり剃刀を研ぎしつら

旋云秋の満ちるるもさるも

斜一し雲は清きりり月

きらけりもさるけり 鴨の世形見

水のかげりり安は陰 平

ともし火はくともさるる花のり

性ハ老うの持はあはし

長閑きくまはるるん 幾飲書之

所 巻 所 巻 所 巻 所 巻 所 巻 所 巻

秋

全三

ひるまに位時をくらむるす
上座は土の見布もつらき
吃りくして事とておのふ
買ものも何を限りたすの布
活きき雪のうらみもさ
張るは鼠の馳をり炬のあき
粒ひの影も砕のさきし
麻袋の糸はもつらき有る
痺しきさきをし喘せぬ
さらりと月をもちて
くらくらやまらるる
物くもよみ勢ひの神法

所 芝 所 芝 所 芝 所 芝 所 芝 所 芝

させぬ影もつらき
かけのつらみ
爪まきる
柱は
皆この

所 芝 所 芝 所 芝 所 芝

石も
草は
わが
さく

三芝
袖丸
多牙
芝

遠くを渡る旅の白ひの湯の面り
かほもさきぬれぬのさき梅
雇人の早いまやうと差をらま
笑うはほく目くらな影のま
社序の静けさみよる様
午時の鼓のきと海ぬるる
舟の生餌を早よ干して
勝手を知るはく階を留る香
まとうらる木の音を母のさ
色のまきしき目のふりか
肩ま列くべきはまのちも便利
止占のまの園をまき

芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸

上

懐るの濡るをぬるまじ
まやまのほきけりい
まららの流ぬあり
植木を成るを移る
口歩の上りまよひ
博のおと解のまき
退る屈ららるま
仰山く新橋ん方
虫のまき悟るま
我ををわやうもの
まのまの旅古一西の園

芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸

○秋

卒四

遊春の鯛く月夕のさるさる
 藤の住む虫いも上を鳴け
 山雀も藤をさす申すは放生云
 賄方も冬をり 藤中
 呪よ拭きよふ少ぬ 蓮の痛に
 名を忘きよく 熱ハ忘きよ
 太ぬしよのほけり 雪の花おち
 ちあ ちあ 強生たす

丸 牙 芝 牙 丸 芝 牙 丸

名月や海流と雨は山をこら

金石

実のりて 波の静りし 福
 破おその家を之馬の二匹あらん
 門まひいて馬のうら小あさ
 人おどろを信病犬の泣くさま
 木の葉を夜をうきゆりて風
 十月結素をよ 種く藤の書
 とくくとおる 吸るる酒
 陰膳をねもろ 穂のお箱の
 こかまを雨は づるる痛る
 布とぎひさくあい多そなるる
 然く相まきく 虫のさるる
 浮るの山の岩を 曳くもく 藤

石 北 石 北 石 北 石 北 石 北 石 北 石 北 石 北

帆をよこしつゝ成る杉をよそか
 帆がまよふ生流も流る楫内
 つらふものさそし肩へ風を
 月元の奈衣相乗し船乗を
 眼ささめさやら起て飛の鯨
 時計しるをたれねや無の鐘の聲
 杉老の人の中進るはし
 都におつと下さ人の若あおの女
 若も海草の里は掃し海
 老しくと消る神楽の端唱古の
 雲井しとらうらゝ暖めるれ
 お屏の背をよそ代えし見はる

石 石 石 石 石 石 石 石

かなきけ 志らぬのいままは
 何らそひささあも 根のよ加減
 出汐をそる計 市の月
 不そそ吹やそも秋を悔の風
 此のつらさそ 岸のむし
 粟飯もたうえきもらう 旅心
 うらさそつらね 志る船湯より
 結んまを 掘り 穀物の茶
 一由正月も 若きこころはり
 ありくのい雲のそ 何よの花を
 貝割をむらう 菜うし菜

石 石 石 石 石 石 石 石

○秋

六六

冬の部

陰雪は影を養ひて雪の上
晴り方小陣る江の船
関を河と市のはと高枝はく
まこの硯の水をさむむを
月の芽はついで四の吹送り
秋引うけてまゝ竹原
やうきと雄琴のまのうらめ
佐牌とぬくとまゝの池を
くめはらぬ世帯は池通

古
空
永機
但康
臨
機
康
臨
機
康

上

ふらとゆき水鏡の照てさ
福甚末は一まをうらまゝ
天のまももまゝまゝ
山名はまももぬきまもも
狂をむかひの鏡を
うらまゝを親のまゝのまゝ
まももをうらまゝ
高枝はまもも涼しい月も
+ 畑の生ら葉はまもも
わくまもも下くと付てまもも
まももをまもも
解りぬてうらまゝのまもも

臨機、康機臨機臨機臨機臨機

○冬

本七

高き... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...

康 機 康 機 康 機 康 機 康 機 康 機 康 機

上

宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...

康 機 康 機 康 機 康 機 康 機 康 機

宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...
 宿る... 宿る... 宿る... 宿る...

康 機 康 機 康 機 康 機 康 機 康 機

○冬

辛六

屋上
 士前

儒 鶴

比やくとき世は少経よみよくて
 とらそとけは事探途の富士
 産間より少言を壁を急のつり
 一身をぬけり星の志ひる
 二三編草しと美の儀く吹そ絶て
 心せ世はうたけりくねの月
 比翼紋うまのまつく深くつる
 あまははるのく徳を親より
 ちあゆみ歩を新道ちあこ会そ
 くらん照らすの花の四五の
 石彫も彫らるる心とまきゆき
 沙干はゆきあまきここ人

上

前 前 前 前 前 前 前 前 前 前

餅作のまよき世に味を
 又月日はまよき世に味を
 片やまよき世に味を
 十夜田のちちりや雪
 煙のまよき世に味を
 袴のまよき世に味を
 典のまよき世に味を
 自身を流るる世に味を
 自身を押まぬ世に味を
 自身をうつけ世に味を
 自身を咽の世に味を
 自身をさるる世に味を

前 前 前 前 前 前 前 前 前 前

○冬

五九

汲まゝの時雨をひたり桶の水
 のうらむとち居ぬ地のかき啼
 榊舟穂とち居ぬ人のまゝと
 林をまゝとち居ぬ人のまゝと
 龍ふ失をまゝ供ふの結糸の目
 門の程をまゝのけりある 押
 駿河路とち居ぬ程をまゝとち
 杜をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 とち居ぬ寺侍のぬけをまゝとち
 ぬをまゝとち居ぬ程をまゝとち
 に居ぬとち居ぬ程をまゝとち

春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲

都をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 大降をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 細湯をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 中 汲をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 冬をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 ひとくうの花のまゝとち居ぬ程をまゝとち
 口をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 夕をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 冬をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 春をまゝとち居ぬ程をまゝとち
 秋をまゝとち居ぬ程をまゝとち

春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲

訪れつゝくも 雲の 上
仕合ふ多かるる 松を 雲の 也
一雨 沢の 水 び みる なる なる
多 ぬ ね づ つ なる 心 なる なる
夕 なる なる 丸 なる なる
松 なる 雲 の なる なる なる
さ なる なる の なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる

雲 春 雲 春 雲 春 雲 春 雲 春

抱くく 春の 暮の 陽空

春

春のくく 不 御を びく なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
今 なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる

左岳 朴因 因岳 因岳 因岳 因岳

○冬

七三

以てしりて異なる言多ありの端しきま
 せりしことめく、松の夕ま
 空回りの瀟々、詠用の有むを
 上ありと奢りつゝものた返し
 紫の戸もあきらまきま月のみ
 鴨言海の吟る。水 おと
 折のしも角力やあしく成りて
 山うとも花うと道道を繕うて
 曇餅を平せり遠き、晴の朝
 田舎うありしる家々の終はし

岳、因岳因岳因岳因岳因岳

上

道は具存の何うあるやらうも又
 とるけくやうふ無のを引
 服のものをやうふもあつりと
 ぬりくとも草草垣きりる冬、梅
 一歩さし、ふんようき山茶花
 中、いりし、いりし、いりし、いりし
 彼もなうも場たすりの止る味
 けり地のぬる、ぬる、ぬる、ぬる

岳因岳因岳因岳因岳因岳

○冬

吉

樹酒を飲むと飲人か
こころを針をうんあや
笑すむまをひつる花
為るまを言はく人か

兵國岳園

上

区一 事は時雨や袖の左より
むうむいゆをく 蟻をむく軒
端の油陶を結ぶ流る
ゆきの用は花をむくつる
そまこまんと居候は 其のまると

茗好
石好
好山
好山

列るまをく 形をく麻留
流標の眼をまを付流るのり
併し するまをく 根性
端流る人の怖るる 藤原約
湖標のまをく 夏の川 何れ
入札の 松の 松の 買ひ出し
海け 照い 事く 去ぬまをく
月のまをく 恨そのまをく 一のまをく
こころをく 心を 流る まをく
かみ 流る 事 流る 秋のまをく 若く
流る 大まをく 流る 流る 流る
一人の 流る 流る 流る 流る

好山 好山 好山 好山 好山 好山 好山

○冬

三五

十
 初午の灯しつらと並ぶ
 朱箱の首をとりてはき
 産身を抱えぬるは松
 物陰らしくなる縁
 古き座持りてまゝある
 こゝこゝの鯛は剣と
 揺る揺る男衆と持
 ちまぬちなる浄土
 鶴の舌を白く折る
 美事なりと光琳の
 花のまゝの母の社

山 好山 好山 好山 好山 好山 好山

いちばんの成りたる
 鐘をくちまの
 飯まきく包の
 白壁の
 ちんちんを
 ころころの
 ちんちん

好山 好山 好山 好山

空の
 灰の

永櫂
う洗

○冬

美

おの隙白の葉點るなまほし
いつらつもの影うまゐる
待宵と雨と定ね日和順
犬の聲きく秋を淋しき
ひんねさく松子にほろり門掃て
和者とりんと世事と當世
山道の見てもも長い登り舟
初雪も志らぬも世を渡りぬ
苦界とみ海を繞り向ふ晚
こそんれたそしる月の初光
柳と霞とさるる雨を打て
砂の宿子ぬけ半息杖

機洗機洗機洗機洗機洗機

後ろろろろつる嚏を(離すらん)
末つ四年の汁と実のぬき
花の布と宮の仮や屋ととせうけ
活生 儼として曇るひるお
つる影平一岐阜の相事と出だ
價のさるなり 結を おく末
手修らう丸形燈を張ろう
晴も日影のうらみのさしこき
帷子の袂とすまゐるみのふ字
まゝと移らうつねさる望の糸
甚多花ひらひやうと火を埋て
二里の峠を二里 出をき

機洗機洗機洗機、洗機洗機

○冬

七

る集るは音の影をを解けり
去つて入りぬく山田片麓
見新て其の影を人新りしき
海戸場のやの波うらるる
から橋を風うあうる冷や
つらうらうらぬるあふ
弘とうらわ出世の種となふ
二京の田うらよい田を
志のともと灯影の影申
酒をさし申るまの影を

洗機 洗機 洗機 洗機 洗機

上

か影の影をを解けり
去つて入りぬく山田片麓
見新て其の影を人新りしき
海戸場のやの波うらるる
から橋を風うあうる冷や
つらうらうらぬるあふ
弘とうらわ出世の種となふ
二京の田うらよい田を
志のともと灯影の影申
酒をさし申るまの影を

涼坪 宇坪 宇坪 宇坪 宇坪 宇坪 宇坪

甚

○冬

夫

春の中一野の土春の此こ路

上

宇

鴨の鳴方よると暮るる野末之亂

時局のかりをくらるる舟

さうさうと土末の宿の暮付静さく

こころのゆきありあつる中

経路のほけを流りたり

秋の暮るる中かまらつたる

気味さうとほとハ編も隣りなし

新想言くつ々々大入

梅后

全波

波后波后波后

耳をききし癖は娘の味し

こころの静さく二つ笑はり

世は直にさきも極る極る

ふのさ外るさきさく故を遠

きりくると静さき竹の月巻て

揺るさくさるる冬の日売

揺る家ちさみさく四の橋揺る

隣りふ水乃の影の暮るる

吹流るもさくさくさくさく

はさるるさくさくさくさく

うらうらと静さくさくさく

さくさく上下の静さくさく

○冬

半

后、波后波后波后波后

昔もふ舟積り 埋むる
秋をきき 喜ぶの縁も取らば
かたし 掃子やつとまらむ
空分の娘も 似ぬ仕人やう
不測りと 誰もゆゑ 眞の言
及まの 水成昔も 祝あらん
夕顔 ちりくとも 長夜の露
坊もあ 長以月の 右京 柄
買もふ 市に 見らるる 履み
あら 建武風も たり人を 携へ
神の 性もなき 朝の 棚
月花に 遊びの 夢の 寝まき

笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠

義も 舟の たり 歎冬 の 産
乙多の 九尺 百口 しの ぞう 人
くは 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
夜 縁も 高ひ 冥理 せら 舟も
志ん とも ちりくとも 舟も 舟も
舟の 縁も 舟も 舟も 舟も 舟も
あゝの 舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も 舟も

笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠

○冬

全三

楮もきぬさのしりり多を
以麻等の楮多きあはる冬際
雲が列る先を多ふころ
黒いのが醫者の眼候は守りた
まかきりては小便をさる
うきうきとせむきはけしむのふ
鐘北すしりし暮の夕暮る

上

宇 笠 狂 宇 笠 狂 宇

俳諧目多法書上の巻終

